九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

蘭文和訳論の誕生 ： 志筑忠雄「蘭学生前父」と徂徠・宣長学

大島, 明秀
熊本県立大学

https://doi.org/10.15017/4061064

出版情報：雅俗. 18, pp.37-54, 2019-07. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

雅俗
第十八号　令和元年七月

蘭文和訳論の誕生

―志筑忠雄「蘭学生前父」と徂徠・宣長学―

大島　明秀

◉論考

蘭文和訳論の誕生

―志筑忠雄「蘭学生前父」と徂徠・宣長学―

大島　明秀

はじめに

志筑忠雄（中野柳圃、一七六〇～一八〇六）の登場によって、近世日本のオランダ語理解が飛躍的に向上したことは定説となって久しい。ただ、緩徐ではあるが志筑の天文・物理学的著作や海外事情・地理志に関する研究が進められてきたのに対し、蘭語学研究については、大半が資料紹介や翻刻に留まっている状況にある。加えて、これら先行研究の主な問題点は、次の三点にまとめることができる。

第一に、志筑の著作は全て写本で残存しているため、論を進めるには、諸本を校合した上でテキストを定める文献学的な手法に基づく必要があるが、かような取り組みが為されてこなかったこと。

第二に、志筑の生前に成された著述と没後のそれとを弁別していないこと。特に没後の著作には門人をはじめとした書写者の手が加わっていることが想定でき、生前の著作との扱いを同一にすることはできない(1)。

第三に、志筑が典拠としたオランダ語文法書に加え、影響を受けた国学や儒学といった学問背景が十分に究明されていないことである。

以上を踏まえて、本稿では、志筑の手で編まれたオランダ語文法学書のうち最も謎の多い「蘭学生前父」(2)を主題として(3)、その現存写本を比較検討した上で、手始めにこれまで不明であった書名の持つ意味を解き明かし、そこから志筑の執筆意図と該書の方針を浮き彫りにする。ついで、各種蘭書や徂徠学ならびに宣長学からの影響を勘案しながら、志筑が該著で達成したことを明らかにし、日本蘭学史における「蘭学生前父」の位置を定めるとともに、志筑蘭語学の後世への伝播相についても併せて検討する。

一、本来の面目を識れ――書名の意味と執筆の狙い――

(1) 書名の意味

管見の限り、現存する「蘭学生前父」は岐阜県歴史資料館蔵本（以下、岐阜歴本）、神田外語大学附属図書館神田佐野文庫蔵本(4)（以下、神田佐野本）、公益財団法人無窮会専門図書館蔵本（以下、無窮会本）、早稲田大学図書館蔵本(5)（以下、早大本）の四本である。

資料の成立年次を明確に示す記述は確認できないものの、まず、文化二年（一八〇五）二月の志筑自跋(6)を有する「四法諸時対訳」（岐阜歴本）に「生前父」の名が確認できることから(7)、それ以前に成立

した著作であることが分かる。次に、後述するように「蘭学生前父」の自序には「柳圃」署名が認められるが、目下この号の初出は「日食絵算」における享和三年（一八〇三）一二月の自序であり(8)、ついで、「大槻玄幹宛中野柳圃蘭文詩（甲・乙）清書」（ともに一八〇四年三月）にも蘭文署名 wilgen akker（柳の田圃）が窺える(9)。これらを勘案すると、「蘭学生前父」の成立時期は、志筑の生前、享和三年の後半頃から文化二年二月の間と見てよいだろう(10)。

さて、志筑が生前に著したオランダ語文法学著作を見ると、初期は「和蘭詞品考」、「助詞考」といった文法用語や単語・句の説明あるいは語彙集に留まっていたものの、二十年にわたる「暦象新書」（一八〇二成）訳業の完了後は、「三種諸格」、「四法諸時対訳」のように、名詞の性・格変化や動詞の人称変化、もしくは時制や法といった西洋文法カテゴリーにおける各種項目に狙いを定めた各論が編まれ、加えて、それぞれの書名は内容を反映して付されている。かように見ると、「蘭学生前父」は「暦象新書」完成後に成立したにもかかわらず、その題名からは一瞥して何を意図した著作であるかは汲み取りにくく、さらに言えば、その命名の在り方も随分異質である。

そもそも書名は何と読むのが正しいのだろうか。この問題に先鞭をつけた杉本つとむは、先に岡村千曳が「ランガクセイゼンノチチ」と読み方を示していたことを紹介しながら、馬場佐十郎『蘭語冠履辞考』（一八五五序）に「ランガクセイゼンフ」とルビが振ってあることから、これを正しい読みとしたが(11)、書名の意味するところは依然不明のままであることからすると、むしろこの読み方は通称であると見る方が適切である。

ここで従来看過されてきた志筑自序に着目したい。当該序は、現存する四写本のうち美濃大垣藩医であった江馬家の蘭学塾に蔵されていた岐阜歴本(12)と、『遠西観象図説』の著者として知られる尾張藩医吉雄俊蔵（常三）の塾で校合した写本に遡る神田佐野本(13)にのみ確認できる(14)。

> 物氏の訳筌に漢学をせんものは文字の本来の面目を識れといへるが如く、蘭学もまたさるわざなるから、おのれ此ごろ和漢の語をふらびて訓訳しつる。此ふみの名をも、かの生ぬ[生れぬ]前の父そこひし[をしも]きとよめるが、本来の面目をいへる歌なるにそへてなん蘭学生前父とは名づけつる。柳圃書[著](15)

後半の二重傍線部から、志筑は「生ぬ[生れぬ]前の父そこひしき」を下の句とする「本来の面目をいへる歌」を典拠として題を付したことが分かる。結論から言うと、その「歌」とは、志筑在世時、人口に膾炙していた道歌「闇の夜に鳴かぬ烏の声聞けば生まれぬ前（先）の父ぞ恋しき」である(16)。歌意を読み解くために、「生まれぬ前（先）の父」と同義である「父母未生以前本来面目」という文句を参照すると(17)、その心は、認識している人や物の姿は本来の様相ではない、という禅的な境地にある。これを手掛かりに本題の道歌に立ち戻ると、「闇の夜の烏」は見えず、「鳴かぬ烏の声」は聞けず、「生まれる前の父」を知ることはできない。そこから転じて、凡夫には知ることができないが、物事には「本来の面目」（本当の姿、様相）が存在する、という禅的な境地を意味する歌ということが分かる。

後述するように、「蘭学生前父」は蘭文和訳論であり、当時世間では理解されていないオランダ語の「本来の面目」、すなわち志筑のみが見

表１　志筑忠雄のオランダ語文法学著作

著述名	成立時期	成立時期の典拠	内容	備考
志筑生前				
和蘭詞品考	寛政９年12月18日（1798年２月３日）以前	宇田川玄随撰「蘭学秘蔵」（早大本）	文法用語や単語・句の説明	
助詞考（助字考、和蘭助語考）	寛政９年12月18日（1798年２月３日）以前	宇田川玄随撰「蘭学秘蔵」（早大本）	冠詞、代名詞、前置詞、副詞、前置詞、句などの語彙集	
三種諸格	享和３年（1803）後半頃から文文化２年（1805）２月以前	「四法諸時対訳」（岐阜歴本）	名詞の性・格変化、動詞の人称変化など	「西肥　崎陽柳圃中野先生撰著」（岐阜歴本）とあり
蘭学生前父	享和３年（1803）後半頃から文化２年（1805）２月の間	柳圃号（序文）の使用、「四法諸時対訳」（岐阜歴本）	和訳論	
四法諸時対訳（蘭文法諸時）	文化２年（1805）２月	岐阜歴本跋	時制と法	柳圃号の使用（岐阜歴本）、「三種諸格」および「蘭学生前父」に言及
蘭詩作法（大槻清準撰「三国祝章」の一編）	文化２年（1805）頃	「三国祝章」目次（早大本、ただし「蘭詩作法」部分本文は脱落）	作文	
志筑忠雄没（文化３年［1806］７月）以降				
柳圃文集	享和３年（1803）８月以降	大槻如電手稿	日本語の各種文章をオランダ語訳したもの	志筑没後の編集か
蘭語九品集	「三種諸格編」、「蘭学生前父」以降	静嘉堂文庫本	時制、法、品詞など	志筑没後、西吉右衛門が「蘭語九品集」を編集、のち馬場佐十郎「訂正蘭語九品集」に（「訂正蘭語九品集」諸言、文化11年９月成より）、「三種諸格」および「蘭学生前父」に言及
属文錦嚢（吉雄権之助述、志筑忠雄遺教か）	文政４年（1821）８月		文章解説（統語）	杉本つとむの指摘により、志筑遺教と判断
四十五様（森田千庵著、志筑忠雄遺教か）	文政６年（1823）以降か	片桐一男「『四十五様』について」（『洋学史研究』第27号、2010年）、岡田和子「森田千庵『四十五様』について―中野柳圃・森田千庵と仏文法の関係―」（『洋学史研究』第28号2011年）	動詞の変化を示したもの	一覧表
蘭学凡（大槻玄幹著、志筑忠雄遺教）	文政７年（1824）８月	「蘭学凡」序（早大本）	文法総論	
西音発微（大槻玄幹著、志筑忠雄遺教）	志筑没後、文政９年（1826）１月	版本	音声	
成立年不明				
和蘭語格	不明	未見、「本朝医家著述目録」より	不明	
九品詞名目	不明	杉本つとむ『国語学と蘭語学』（武蔵野書院、1991年）	品詞	
文楚（志筑忠雄遺稿、吉雄俊蔵校訂）	不明		文法用語集	
柳圃先生虚詞考	不明	前掲杉本つとむ『国語学と蘭語学』	冠詞、代名詞などの語彙集	

抜いたオランダ語に対する理解と和訳法の要諦を一三点にわたって提示したものであった。そして、そのことを道歌「闇の夜に鳴かぬ烏の声聞けば生まれぬ前（先）の父ぞ恋しき」に託した書名の後半部は「ウマレヌサキノチチ」と読まねばならず、前半部についても後半部と同じく和風に読むのが自然であろうし、何より本書は和訳論である。以上を勘案すると、志筑が付した書名「蘭学生前父」の読みは「オランダマナビウマレヌサキノチチ」であり、かように読まなければ、本書に込めた志筑の自負と意味、そして資料的な位置づけが闇に埋もれたままとなってしまう。

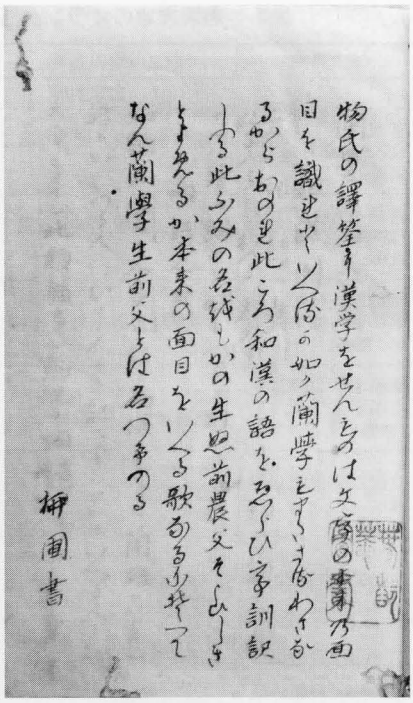


図１　「蘭学生前父」志筑忠雄自序（岐阜県歴史資料館蔵）

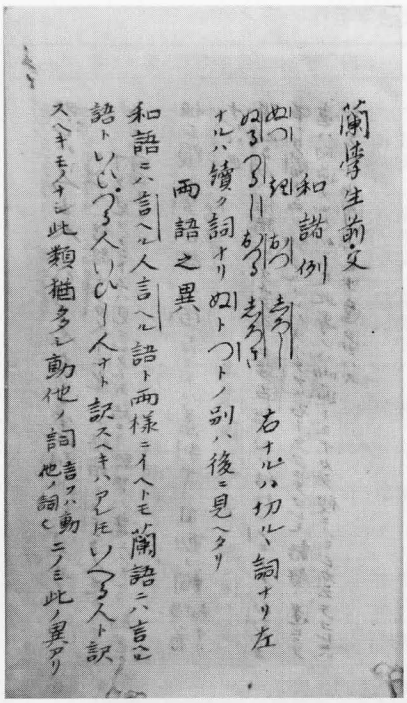


図２　「蘭学生前父」内題。項目１および２も見える（岐阜県歴史資料館蔵）

(2) 徂徠学と執筆の狙い

それでは「本来の面目」とは具体的には何を指しているのだろうか。ここで先ほど挙げた序文に戻ってみよう。

まず、先に掲げた序文冒頭の傍線部は「物氏の訳筌に漢学をせんものは文字の本来の面目を識れといへるが如く」とあるが、ここに言う「物氏の訳筌」とは、荻生徂徠『訳文筌蹄』初編（一七一一刊）を指しており、その序に掲げた「題言十則」の二則目を典拠としている。漢文読解をめぐる状況について一石を投じている当該部分は、「蘭学生前父」序文の破線部「蘭学もまたさるわざなるから」の伏線となっているので以下に掲げる。

此方学者。以二方言一書レ読。号曰二和訓一。取二諸訓詁之義一。其実訳也。而人不レ知二其為レ訳矣。[…]若下此方読法。順逆迴環。必移二中華文字一。以就二方言一者上。一読便解。不レ解不レ可レ読。信乎。和訓之名為レ当。而学者宜三或易二於為レ力也。但此方自有二此方言語一。中華自有二中華言語一。体質本殊。由レ何脗合。是以和訓迴環之読。雖レ若レ可レ通。実為二牽強一。而世人不省。書レ読作レ文一唯和訓是靠。[…]嚮所謂易二於為レ力者。実為二之祟一也。故学者先務。唯要下其就二華人言語一識中其本来面目上。（此の方の学者、

方言を以て書を読み、号して和訓と曰ひ、諸を訓詁の義に取れり。其の実訳なり。しかも人は其の訳たることを知らず。[…]此の方の読法、順逆迴環して、必ず中華の文字を移して、以て方言に就く者の若きは、一読便ち解す。解せざれば読むべからず。信なるかな和訓の名、当と為す。而して学者宜しく或は力を為すに易かるべきなり。但し此の方自から此の方の言語あり、中華自から中華の言語あり、体質本殊なり、何に由て脗合せん。是を以て和訓迴環の読み、通ずべきが若きと雖、実は牽強たり。しかも世人省みず、書を読み文を作るに一に唯和訓是れ靠る[…]嚮に所謂る力を為すに易き者、実はこれが祟りを為せばなり。故に学者の先務、唯ただ其の華人の言語に就きて其の本来の面目を識らんことを要す。(18)

ここで述べていることをまとめると、以下のようになる。

「此の方」(日本)の学者は、日本語で漢籍を読んでおり、それを「和訓」(訓読)と名付け、訓詁学(語義を研究する学問)として認識しているが、これは翻訳でしかない。しかも世間の人はこれが訳業であることを自覚していない。古い漢籍の文章も、「和訓」を用いて当代日本語の形に変えることで簡単に理解できるようになる。しかしながら、日本には日本の言語があり、中国には中国の言語があり、その性質を異にしていることから、これを結合させることはできない。漢文を読み下すと意味が通じるような気になるが、それはこじつけにすぎない。しかし、書を読み、文を作る際、「和訓」にのみ拠っているのが現状である。簡便な「和訓」の存在が、実は裏目に出ているのである。よって、学者は中国語に真剣に向き合って、その言葉の「本来の面目」(本当の姿や様相)を知るようつとめることが急務である。

かかる問題点を示した徂徠は、中国語の「本来の面目」を理解するために、その語順通りに読むことを提唱し、また、歴史性・地域性を踏まえた本来の字義を明らめる古文辞学という方法を創出したが、実際にはそれほど原文とかけ離れた訳を作成するにはことはなかった(19)。つまり、徂徠は訓読という翻訳方法に問いを投げかけることには成功したものの、それを大きく改めるような和訳法の提示にまでは至らなかったのである。

他方、蘭文読解の状況に目を移すと、「蘭学」の権威であった大槻玄沢が成した『蘭学階梯』(一七八八刊)や、宇田川玄随「蘭訳弁髦」(一七九三序)あるいは前野良沢「蘭語訳筌」(一七九七跋)など、志筑の同時代における蘭学書に示された和訳法は、オランダ語に一対一で訳語(主に漢語)をあて、語順を示した訓点を振って転倒させて読む、いわば「欧文訓読(20)」と呼びうるようなものであった。

ここで「蘭学生前父」成立前後における外国語和訳法の状況を踏まえて再度まとめると、徂徠は中国語理解に対する画期的な理念を示したものの新たな和訳法の提示には至らず、加えて蘭学者によるオランダ語読解法は従来の漢文訓読を応用した「欧文訓読」の域に留まっていた。

かかる状況下で志筑忠雄は、アルファベット表記の上に文法体系が日本語とは全く異なるオランダ語に対峙し、「蘭学もまたさるわざなるから」と、オランダ語にはオランダ語の性質が存在することを見抜いた上で、『訳文筌蹄』の理念を踏まえてその「本来の面目」の理解に向き合い、徂徠が成しえなかった外国語の和訳法、すなわち「欧文訓

読」から離れたオランダ語和訳とその方法の提示に臨んだのである。

図3　大槻玄沢『蘭学階梯』1788刊、下巻「成語付訓点並二訳文」（ゆまに書房、2000年影印版より）。オランダ語文の下方に対応する漢語が示されているものの、語順は示されていない

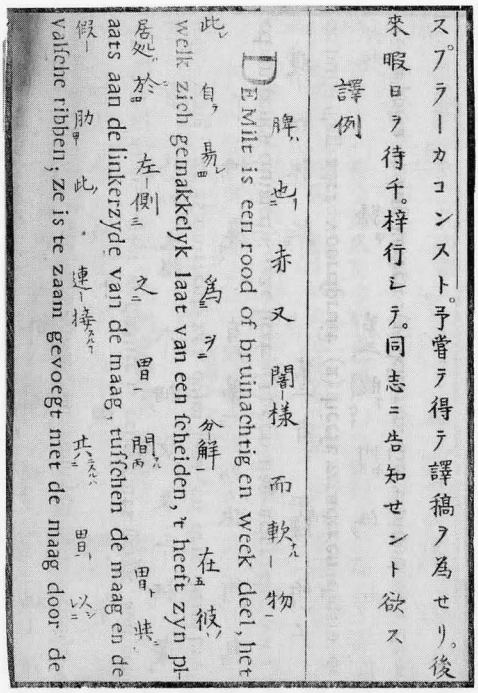


図4　藤林普山『蘭学逕』1810刊「訳例」（架蔵）。志筑没後においても「欧文訓読」が中心的な読解法であった

二、和漢の語をえらびて訓訳しつる
―蘭文和訳論の構成と展開―

（1）内容構成

それでは志筑忠雄はいかなる和訳論を展開したのだろうか。ここで「蘭学生前父」の内容構成を理解するために、神田佐野本に転写過程で付加された目次を示す。なお、番号は筆者による。

1　和語例
2　両語ノ異
3　蘭語三世名目
4　切ル、詞
5　続ク詞
（1）動他詞
（2）自動詞
（3）静虚詞
6　三世図
7　六詞ヲ重ヌル秘訳(21)
8　事迹ノ詞
9　種々ノ詞遺ヒ
10　zouden ノ事
11　種々ノ結ヒ詞
12　六詞秘訳并定格
13　詞品図

上記のように「蘭学生前父」は一三項目から成るが、本書の狙いや

体系を理解するために各項目の内容を確認していこう[22]。

項目1「和語例」では、日本語の言葉の活用を対象としている。完了などを表す助動詞「ぬ」が、「ぬる」となった場合には次に言葉を接続するが、「ぬ」の場合にはそこで終わるように、言葉には後に語が接続する形（続ク詞）と、そこで終わる形（切ル、詞）とがあることを指摘する。

2「両語ノ異」では、日本語の「いひつる人」、「いひし人」はオランダ語に置き換えることができるものの、「いへる人」に相当する蘭訳が不可能であるとし、それは蘭日で動詞の自他に違いがあることに起因するものであることを説く。

3「蘭語三世名目」では、オランダ語に現在・過去・未来の三時制があることを紹介する。

4「切ル、詞」では、動詞「言ふ」、「隕つ」および形容詞「白し」を例に、様々な時制の（助動詞を伴った形も含めた）切れる形を蘭日対照にして示す。また、自動詞には「ぬ」、他動詞には「つ」が接続することも言い添える。なお、志筑忠雄の時制の考え方は、中世ヨーロッパのラテン文法である叉角的五分法（現在、過去〈未完成過去［過去ノ現在］、完成過去［孤立過去］、大過去［過去ノ過去］〉、未来）に基づく[23]。

5「続ク詞」では、「言ふ」、「折る」、「隕つ」ならびに「白し」を例に、動詞の自他の別に留意しながら、様々な時制の（助動詞を伴った形も含めた）続く形を蘭日対照にして示す。また、他動詞には目的語が必要であることにも言及する。

6「三世図」では、時制を表すオランダ語の助動詞および存在動詞とその変化を図示する。

具体的には、まず、上段左に未来を表す助動詞 zullen が挙げられ、その不定形ならびに一人称主語と三人称主語に用いる際の変化を提示し、右方に過去形である zouden と変化形が示される。中段左には現在を表す存在動詞 zijn と変化形、右方にはその過去形 waaren[ママ][24] と変化形、下段左に完了形を作る助動詞としての hebben、右方に過去形 hadden と変化形が掲げられている。なお、志筑は以上の zullen、zouden、zijn、waaren、hebben、hadden を「六詞」と呼ぶ。

7「六詞ヲ重ヌル秘訳」では、前項6で挙げた助動詞を対象として、その文例と訳を挙げつつ、意味の微妙な差異について比較説明する。

8「事迹ノ詞」では、オランダ語の動詞九語（zullen、zijn、hebben、waaren[ママ]、hadden、spreeken[ママ][25]、vallen、zeggen、worden）ならびに助動詞二語（konnen[ママ][26]、moeten）の不定形と過去形（waaren と

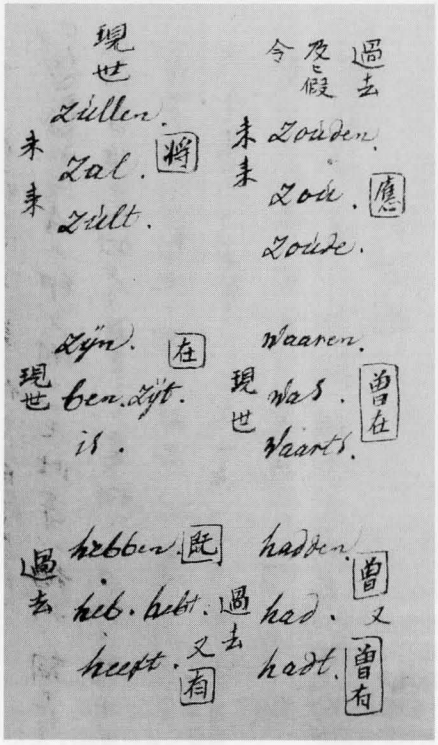


図5　三世図（岐阜県歴史資料館蔵）

hadden は過去完了形）を掲げている。

9「種々ノ詞遺ヒ」では、まず、副文を備えた文章を基本文として掲げ、次に、そこから時制など一部を変化させた計二六の例文を挙げ、その文法的な説明と具体的な訳し方を説く。

10「zouden ノ事」では、zouden（仮定）の訳を古語「まし」に求めながらも、これが同時代に使われない言葉であることから、古歌三種を例に挙げながら「べし」で代用できることを説明する。また、zouden が推量の意で用いられる例も付記する。

11「種々ノ結ヒ詞」では、日本語の文末に用いられる言葉に、オランダ語には該当するものの無い場合があることを説く。具体例として「けり」、「めり」、「らん（む）」、「らし」、「つつ」、「かな」、「がに」を含んだ和歌を引き、その蘭訳例を示す。また、日本語の口語訳も併記する。

12「六詞秘訳并定格」では、項目6で扱った六語の訳例で、どの品詞に付いたらどう和訳すればよいかが分かるような具体的な訳語を与えている。

13「詞品図」では、蘭日両語で品詞を挙げ、その関係を図式化している。ただし、説明は付されていない。

ここまで計一三に渡る項目を見てきたが、項目1～5までが基礎編（蘭日の文章構造および言葉の活用に関する基礎知識）で、項目6～13が発展編（文例と具体的な和訳法）と考えてよいだろう。オランダ語については、全体を通して詳細な文法事項に説明が費やされることはなく、むしろ動詞の自他、助動詞、そして時制の説明に紙幅を割いている点に特徴がある[27]。

留意すべきは、「蘭学生前父」という著作が、志筑の他作品のようにオランダ語文法の理解のみに焦点を絞ったものではなく、その読解したオランダ語をいかにして日本語に置き換えるかということに照準を合わせた仕事であることで、その達成のためには、当然日本語の「本来の面目」に対する理解も不可欠であった。かかる意味合いにおいて、「蘭学生前父」は志筑による日本語文法学とも言え、したがって志筑は、オランダ語理解の要諦をとりわけ動詞の自他や助動詞ならびに時

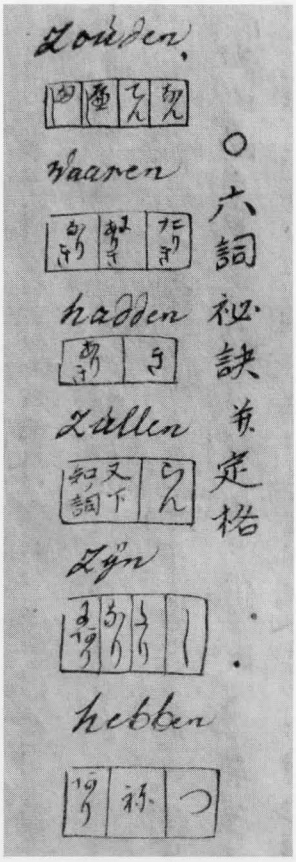


図6　六詞秘訳并定格（岐阜県歴史資料館蔵）。ただし「訳」を「訣」に誤る

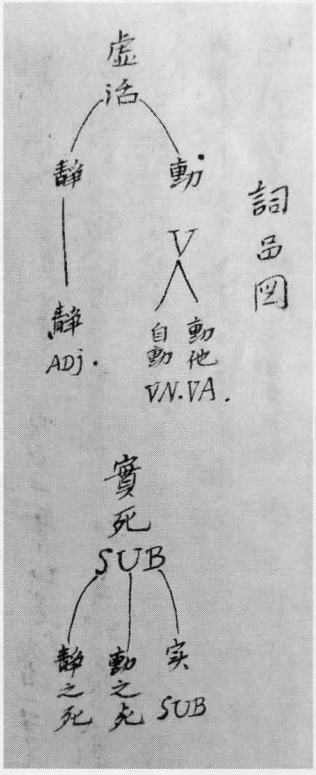


図7　詞品図（岐阜県歴史資料館蔵）。ここでの「虚」は動詞と形容詞、「実」は名詞、「死」は用語が活用しないことを意味する。よって、「静之死」、とは形容詞が名詞化したものを指す

表２ 「蘭学生前父」の内容構成

	項目（目次）	内　　容	分　類	典拠の明示（岐阜歴本より）
1	和語例	日本語（和語）には、後に語が接続する形（続ク詞）と、そこで終わる形（切ル丶詞）とがあることを指摘	言葉の性質（日本語の活用）	
2	両語ノ異	オランダ語と日本語を対照させながら、意味上は同じでも自動詞・他動詞という点で異なり、訳すことができない言葉があることを説く	言葉の性質（蘭日の自・他動詞）	
3	蘭語三世名目	オランダ語には時制（過去・現在・未来）があることを紹介	文構造（時制：用語の説明）	
4	切ル丶詞	「言ふ」、「隈つ」、「白し」の様々な時制の（助動詞を伴った形も含めた）切れる形を蘭日対照にして示す。加えて、自動詞には「ぬ」、他動詞には「つ」が接続することも言い添える	言葉の性質（蘭日語の切れる形への活用）	
5	続ク詞 動他詞 自動詞 静虚詞	動詞の自他の別に留意しながら、様々な時制の（助動詞を伴った形も含めた）続く形を蘭日対照にして示している。また、他動詞に目的語が必要であることにも言及	言葉の性質（蘭日語の続く形への活用）	「本居氏」、「物氏」、「marin 三板」、「halma 初板」
6	三世図	時制を表す６詞（オランダ語の助動詞および存在動詞）とその変化を図示	文構造（時制：６詞とその変化）	
7	六詞ヲ重ヌル秘訳	６詞の文例と訳を挙げ、微妙な差異について比較説明する	文構造（時制：６詞の文例、具体的な和訳、意味の差異）	
8	事迹ノ詞	オランダ語の動詞および助動詞９語の不定形と過去形を挙げ、さらに助動詞２語の過去形と過去分詞を掲げる	文構造（時制：動詞および助動詞の不定形、過去形、過去分詞）	
9	種々ノ詞遣ヒ	従属節を備えた文章を基本文として掲げ、そこから時制など一部を変化させた計26の例文を挙げ、その文法的な説明と具体的な訳し方を説く	翻訳法（文例と具体的な和訳）	
10	zouden ノ事	zouden は基本的に古語「まし」で訳せばよいが、同時代語「べし」で代用できることを説明。また、zouden が推量の意で用いられる例も付記	翻訳法（zouden の訳し方）	
11	種々ノ結ヒ詞	日本語の文末に用いられる言葉に、オランダ語に該当するものが無い場合があることを説き、古歌を具体例としてその蘭訳例を示す。日本語の口語訳も併記	翻訳法（蘭訳が難解な日本語について、その蘭訳例と日本語の口語訳例）	「本居氏」
12	六詞秘訳#定格	項目６で扱った時制を表すオランダ語の助動詞および存在動詞の訳例で、どの品詞に付いたらどう和訳すればよいかが分かるような具体的な訳語を与えている	翻訳法（時制を表す助動詞・存在動詞の和訳例）	「本居翁ノ言葉の玉の緒」
13	詞品図	蘭日両語で品詞の関係を図示	言葉の性質（品詞の関係図式）	

制の理解に見ながら、これと並行して日本語の性質と理解の勘所を説明し、その上で吟味した訳例とその和訳法を提示していくのである。

（2）和訳作成の神髄と本居宣長の言語学

それでは志筑忠雄が提示した和訳論の神髄とはいかなるものであったのか。ここで「蘭学生前父」の典拠を探ると、項目5に「marin 三板」、「halma 初板」ならびに「物氏」、「本居氏」と明示されていることに気付く。前二者の「marin 三板」、「halma 初板」とは、蘭書マーリン『大蘭仏辞典』第三版（Pieter Marin: *Groot Nederduitsch en Fransch Woordenboek.* 3 druk, 1752.）ならびにハルマ『蘭仏辞典』（François Halma: *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche taalen.* 1710.）である。これらは hebeen をはじめとした三語の動詞・助動詞の参照に使用されているが、その利用法は局所的で、蘭書からの影響はむしろ例文の挙げ方に見て取

るべきである。例えば以下を見てみよう。

【項目4　切ルヽ詞】

spreeken[ママ]　言ふ
gesproken hebben　言つ
gesproken hadden　言き
gesproken zijn　言へり
gesproken waaren[a]　言へりき
zullen spreken　言ん
zouden spreken　言べし／言てん(28)

ここでは蘭語 spreken（話す）という動詞の現在形を掲げ、続いてこの動詞の変化形、すなわち現在完了形、過去完了形、受動態の現在形とその過去形、さらに助動詞 zullen を用いた未来形とその過去形（ここでは話者の意思を表す）を挙げている。項目題からすると、日本語の動詞や形容詞、あるいはそこに助動詞を付けて様々な言い切りの形（終止形）を説くことが眼目であるが、それ以上に、オランダ語の一つの単語を軸にそのごく単純な変化形を掲げつつ、日本語の動詞の活用や各種助動詞を使い分けることで蘭語に対応した和訳を示すことを意図したものと見てよいだろう。

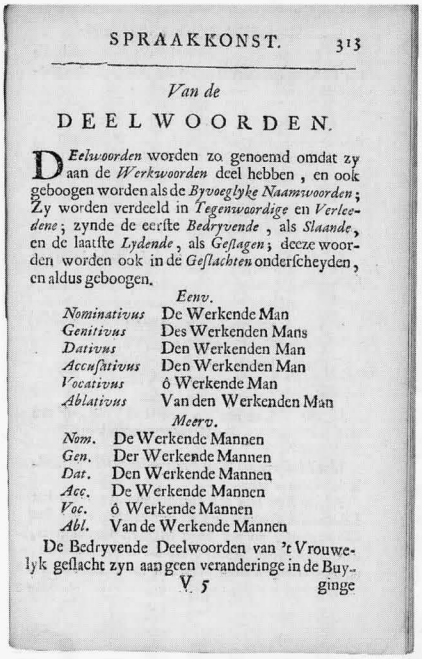
【項目5　続ク詞】

wolk die wit was　白かりし雲
wolk die wit is　白き雲　【白クアル雲也】
wolk die wit word[ママ](29)　白くなる雲　【為白雲】
[…]
wolk die wit geworden is.　白くなれる雲
wolk die wit geworden was.　白くなれりし雲
wolk die wit geworden zal.　白くならん雲
wolk die wit geworden zou.　白くなるべき雲(30)

単語の変化形を扱った前項を踏まえて、項目5では文構造に複雑さを増した、関係詞を使用した例文が挙げられる。上記は女性名詞 wolk（雲）を関係節において wit（白い）で修飾する文章を基本に、そこから時制や助動詞、態を変化させた文例と、助動詞 zullen とその過去形を用いた文例を示し、それぞれに和訳をあてている。項目題からすると、日本語の動詞や形容詞、あるいはそこに助動詞を付けて後ろの語に接続する形（連体形など）を説明することを目的としているが、より重要なのは、オランダ語の一つの文章の変化形を列挙していること、加えて、日本語の形容詞の活用や助動詞を使い分けることで、原語の意味の微妙な差異を的確に訳出していることである。

ところで、項目9に「以上二十七則ノ語ハ余ガ作為ニ出タレドモ各本ヅク所ナキニ非ズ。然レドモ猶倒置等ノ誤[譌]モアルベケレバ後人ノ正シタハン[マヽ]事ヲ希フ(31)」とあるように、「蘭学生前父」における文例は基本的に志筑自作のものと考えられる(32)。種本が明示されてはいないものの、同語もしくは同文の一部を変化させた文例を列挙する方法や発想は、セウェル『オランダ語文法』（Willem Sewel: *Nederduytsche Spraakkonst.*(33)）などの各種オランダ語文典に由来するものと見られる(34)。

さて、「蘭学生前父」の構成や内容を見る限り、「物氏」（荻生徂徠）、「本居氏」（本居宣長）の学問が蘭書以上に影響を与えていることは疑いない。項目5において、志筑は徂徠『訓訳示蒙』（一七三八刊）を典拠として「応」字が推し量る意であることを述べ(35)、また、宣長『古



SPRAAKKONST. 313

Van de

DEELWOORDEN.

D*Eelwoorden* worden zo genoemd omdat zy aan de *Werkwoorden* deel hebben, en ook geboogen worden als de *Byvoeglyke Naamwoorden*; Zy worden verdeeld in *Tegenwoordige* en *Verleedene*; zynde de eerste *Bedryvende*, als *Slaande*, en de laatste *Lydende*, als *Geslagen*; deeze woorden worden ook in de *Geslachten* onderscheyden, en aldus geboogen.

	Eenv.
Nominativus	De Werkende Man
Genitivus	Des Werkenden Mans
Dativus	Den Werkenden Man
Accusativus	Den Werkenden Man
Vocativus	ô Werkende Man
Ablativus	Van den Werkenden Man
	Meerv.
Nom.	De Werkende Mannen
Gen.	Der Werkende Mannen
Dat.	Den Werkende Mannen
Acc.	De Werkende Mannen
Voc.	ô Werkende Mannen
Abl.	Van de Werkende Mannen

De Bedryvende Deelwoorden van 't Vrouwelyk geslacht zyn aan geen veranderinge in de Buy-

V 5 ginge

図8　セウェル『オランダ語文法』（1733年版、架蔵）における現在分詞の項。単複と名詞の格に応じた変化を列挙している

今集遠鏡』（一七九七刊）を典拠に、同じ項目5において助動詞「ん（む）」に推量の意があること、項目11では「らん（らむ）」が疑いの意を含むことを説いているが(36)、かかる局所的な利用より、むしろ前述したように徂徠『訳文筌蹄』における外国語（中国語）に対する翻訳論を「蘭学生前父」におけるオランダ語理解と和訳作成に対する理念としていることに目を向けるべきで、さらには、翻訳に対する理念的側面を徂徠に負う一方、蘭文の和訳法といった実践的側面に宣長の言語学を利用した形跡が認められることにも注意を払うべきである。

【項目12　六詞秘訳并定格】

「言へる」「降れる」「隕たる」「上（アケ）たる」ナドノ言ヒザマハ本（ハ詳ニ本）居翁ノ言葉の玉の緒ニモ見エテ難事ニハアラネドモ、一向ニ国字（学）ニ無案内ナラン人ハ、唯「言（ヒン）たる」「降たる」ナド、皆「たる」ヲ付テ心得ベシ。訳ニ用フルモヨシ。「たり」ハ即チ「てあり」ナリ。(37)

その利用を示す発言は、項目12の『詞の玉緒』（一七八五刊）から動詞四語の用例を援いた箇所に現れ、傍線部から志筑が「国字（国学）」に通じた上で和訳に臨んでいる自負と姿勢が読み取れる。

また、「蘭学生前父」の構成に目を移すと、和訳にあたる基礎的知識として、前半部の項目4に「切ル、詞」（動詞、助動詞、形容詞の終止形）、それに続いて項目5に「続ク詞」（動詞、助動詞、形容詞の連体形など）が配置されていることは、『詞の玉緒』における「すべての詞づかひに。切る、ところとつゞく所とのけぢめあることを。まづわきまへおくべし(38)」を踏まえていることは明らかである。無論、それを日本語だけでなくオランダ語にも適用し、蘭日対照形で示しているところは志筑の応用である。

【項目5　続ク詞】

1：woorden die men gesproken had
　言し語　【曽言之語／言タ語】

2：woorden die men gesproken heeft
　言つる語　【既言ノ語／言タ語】

3：woorden die gesproken waaren（ヤ）
　言へりし語　【曽言在之語／言テアリシ語】

4：woorden die gesproken zijn
　言へる語　【言在之語／言テアル語】

5：woorden die men spreeken（e）zou
　いふべき語　【応言ノ語／言テアロ（ウ）フ語】

「言てん語」トモ訳スベシ。「いひてん」「ありなん」ナド末ヲ推シハカル意ト本居氏イヘリ。又「応」ノ字モ推ハカル意ト

物氏イヘリ。

〔俗〕「言デアラフ[ウ]語」トモ「言ヒソーナ語」トモイフ。

6：woorden die men spreeken moet

正ニいふべき語　【当言之語／イハ[ワ]デカナハヌ語】

［…］

7：woorden die men spreeken zal

言ん語　【将言之語／言ウ[フ]語】

8：woorden die gesprook[o]en worden

言る、語　【被言之語／又所言之語】

［…］

9：woorden die gesprook[o]en kon[ママ]nen worden

言つべき語【可言之語／俗ニハ言ル、語ト云(39)】

項目5における別の例文でも、志筑はオランダ語の時制や助動詞を用いた際の意味変化に応じて、日本語の助動詞を巧みに使い分けて和訳を行っている。叉角的五分法で時制を理解していた志筑は、関係節が過去完了形（大過去）である第1文は「言し語」と、過去の助動詞「き」を用いた和訳を提示し、一方、関係節が現在完了形（完成過去）である第2文については「言つる語」とし、ここには完了の助動詞「つ」を適用する。加えて、割注で第1文は「曽言之語」、第2文は「既言ノ語」という差異があることを説明し、さらに俗語としてはともに「言タ語」となることも付記している。そこには志筑のオランダ語理解の確かさとともに、その理解を正確に表現するための日本語の助動詞を精選している様子が見て取れる。

第3文および第4文では men（人）が脱落し、関係節の中で woorden（言葉〈複数形〉）が主語となっている。オランダ語としては両文ともに（助動詞 worden が脱落した形の）受動態であるが、志筑は誤ってそれぞれを過去完了形、現在完了形と解し、前者の訳文には完了の助動詞「り」と過去の助動詞「き」を用い、現在完了と見ている第4文では完了の助動詞「り」のみを使用し、時制の差異を的確に表現している。

第5文から第7文にかけては、助動詞 zouden、moet、zullen を用いた蘭文と訳例を掲げているが、特に未来形を作る助動詞で、推量の意も含む zullen を用いた第7文の和訳に、意思あるいは推量の助動詞「ん（む）」を適用している手腕には括目すべきである。加えて、第8文は受動態の現在形で、これに対応して受け身の助動詞「る」を用いた和訳を示し、第9文では第8文に可能の助動詞 kunnen を加えた例文と和訳を提示する。そしてかかる方法を、副文を有した文にまで発展させたのが項目9である。

【項目9　種々ノ詞遣ヒ】

Wanneer hij te huis is, durft 'er niemand spreeken[ママ]　彼人家にある時は、彼所ニ在て敢て言ふ人なし　是ハ現世ナリ。

Wanneer hij te huis was, durft 'er niemand spreeken　彼人家ニ在る時ハ、彼所ニ在て敢て言ふ人なかりき

此ハ過去ナリ。事迹ニ用ル時ハ前ナル現世語ト同訳ナリ。結ヒ詞ヲ云[遣フ]ベキ時ハ「言ふ人なかりけれ」トモ訳スベシ。

本項目では、まず従属節を備えた例文を掲げ、次に同文の時制を変化させた文章を示す。そうして基本的な文構造を保持しながら、時制の他、助動詞や接続詞など同文の一部を変化させて作成した計二六の

例文を示し、その和訳と文法的な説明を挙げていく。

とりわけ上記の蘭文と和訳の時制をめぐる対応に注目すべきである。上記第一文の従属節は「wanneer hij te huis is」と存在動詞が現在形で、第二文の同箇所は「wanneer hij te huis was」と過去形で記されている。ところが、当該箇所の和訳は両文同じ「彼人家にある時は」と現在形で処理する。一方、第一文、第二文ともに同形（現在形）である主節「durft 'er niemand spreeken」の和訳に従属節の時制を反映し、「彼所ニ在て敢て言ふ人なし」、「彼所ニ在て敢て言ふ人なかりき」と、文末に時制の変化をつけた訳例を提示する。かかる訳文を作成しうるところに、オランダ語のみならず、日本語の性質・構造にも通暁していた志筑の力量が示されている。

また、第二文において、係り結びが用いられた際に已然形に活用するよう説いているところは、日本語文の結びにこだわる志筑の態度が示されている。なお、項目5でも項目9でも、和訳例と文法的な説明にとどまらず、随所に古語に対する代用語や、俗な表現にまで言及しているところにも注目すべきで、かかる姿勢は、雅語（古語）を自らのものとするために俗語に訳すことを提唱した前述『古今集遠鏡』の仕事に倣ったものと考えられる。宣長によれば、同時代から（縦軸に）距離が遠く離れた古代の雅語を俗語にすることで、物の味を舌で識るように消化し、血肉化することで追体験を可能にするという(40)。志筑はこの考えを応用して、（横軸に）距離が遠く離れたオランダ語に、可能な限り俗語訳まで与えたものと目される。

【項目10　zoudenノ事】

総テ仮令ノ時ハ zouden ヲ「まし」ト訳ス。但シ「まし」ト云語ハ耳遠シテ如何思時ハ仮ニ「べし」ニ代フ

飛鳥川しがらミ渡しせかませば流るゝ水はのどけからまし
世の中にたへて桜のなかりせば春のこゝろはのどけからまし
逢見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人をきくべかりける

下ノ句ノ「べかりける」の「べし」モ「まし」ノ意ニ類セリ。「音にも人をきかまし」ト同意也[ト云ト同]。然バ「まし」と「べし」トハ[ノ]近き詞ナリト知ラル。

假令ト推ハカルトノ弁ハ、右ノ歌の意ヲ以テ左ニ示スニテ知[知リヌ]スベシ。

飛鳥川ニシガラミ渡テセイテ見タラバサゾ流ル、水ガ長閑[ノドカ](41)デヨカラフニ、セカズニア　ルカラ一向ニノドカナ事ハナイ。

右假令ナリ。即本歌ノ意。

飛鳥川ニシガラミ渡テセクハヅカ、セカヌハヅカ未タシレネドモ、セクナラバ水ガノドカニ流ル、デアラフ[ウ]。

右ハ推ハカル意(42)。

ここで志筑は、仮定法を作る助動詞で、場合によって推量の意味を示す zouden にふさわしい訳語に願望の助動詞「まし」を選び、「万葉集」から一首、「古今集」から二首選出して用例を提示する。ただし、「まし」が同時代に使用しない言葉であることから、助動詞「べし」で代用できることも併記し、さらに、「まし」の意が推量で用いられる例についても論を進める。なお、古歌に用例を求め、文法的に説明する方法は、言うまでも無く国学のそれである。

和訳を追求する中で、かように日本語文の結びにこだわった志筑の姿勢は、項目11に遺憾なく発揮される。

【項目11　種々ノ結ヒ詞】

「けり」「めり」ハ意ノ決スル詞ナリ。其内「けり」ハ過去、「めり」ハ現世。蘭ニハ様々ノ点ヲ以テ句ヲ絶ツ故ニ、「けり」「めり」ニ当ルベキ詞ナシ。唯末ニ畢点アル所ニ自ラ是等ノ意ヲ含メル所多シ。文勢ニヨリテ知ベシ。詳ニ説ク事能ワズ。假ニ一二例ヲ示シ[サン]。

河水流れて流るめり

de lente is al gekomen.

右ノ「けり」「めり」ノ外ナル詞ハ定格アルモノ多シ

hoe zo haastelijk vallen de bloemen af!

しづこゝろなく花のちるらん

疑ノ詞ト末ナル嘆息ノ点トニヨリテ「らん」ノ意ヲ知ル。但シ現世ノ詞ナリ。「らん」ハ「つらん」「ぬらん」何レモ同意ナリ。譬バ歌ニ[ヲ]「いふらん」ト云テハ一字足ラヌ時ハ「いひつらん」ト云事ヲ[ヲ]得。本居氏曰、此「らん」ハ然ルヲ疑ニアラズ、然ル所以ヲ疑ナリト云ヘリ。

misschien is de zomer al gekomen.

夏来るらじ[らし]　「らし」モ現世ノ詞ナリ。

持統天皇ノ歌[御歌]モ、万葉ニアル本歌ハ「夏来たるらし」とアリ。俗ニ[ニハ]「夏カ来タソウナ[ソーナ]」ト云フ

「らし」ト常ノ「らん」トヲ[ノ]分別スベキ蘭詞[語]未ダ思ヒ得ズ。

[…]

O, wat is het haastige afvallen der bloemen!

しつ心なく花のちる哉　「かな」ハ現世詞ナリ。

此ハ嘆息ノ詞ト疑ノ詞ト末ノ嘆息ノ点トニ由テ知ル。

他と比べて項目11がとりわけ異質なのは、日本語文の結びの言葉でオランダ語に該当するものが無い場合の和訳法を説明していることで、そのため、蘭文を掲げてそれに対して和訳を作成するのではなく、反対に、人口に膾炙された古歌を先に用意し、その助動詞に説明を加えながら、それに対応した蘭文を提示する方法を採っている点である。

ここで扱われた結びの言葉は、過去や詠嘆の助動詞「けり」、推定の「めり」、推量の「らむ」、推定の「らし」、過去推量の助動詞「けらし」、動作の並行を表す接続助詞「つつ」、詠嘆の終助詞「かな」、さらには中古の言葉である願望の終助詞「がに」に及び、その蘭訳例が示される。

ともあれ、ここまで見てきたように、オランダ語の時制や意味するところを正確に反映しつつ、同時代において自然な日本語表現でもある和訳を追い求めた志筑は、その神髄を日本語文の結びに見出したのである。

おわりに

志筑忠雄は晩年、二十年に及ぶ天文物理学書「暦象新書」訳業や、「鎖国論」をはじめとした海外事情・地理志の翻訳経験をもとに、オランダ語の和訳論である「蘭学生前父」を著した。本書において志筑忠雄は、外国語の「本来の面目を識」ることを説く徂徠『訳文筌蹄』の翻訳論を自身の和訳論の理念に据えた上で、蘭書に基づきながらオランダ語例文を自作して、動詞の自他、助動詞、時制を中心に蘭語理解の要諦を提示し、さらに、宣長の言語学を援用して日本語の活用形を

説きつつ、とりわけ助動詞や終助詞など文の結びの選定を眼目としながら、オランダ語の時制や意味するところを表現するのにふさわしい、加えて同時代において自然な表現でもある和語を、時には俗語まで入念に吟味した。

オランダ語文を日本語文に置き換える蘭文和訳という営為は、オランダ語に精通するとともに、日本語の「本来の面目を識」ってはじめて達成しうる仕事であったが、見事にこれを成し遂げた志筑の訳文は、それまでの漢文まがいの訓読とは一線を画した、はじめて日本語と呼びうる文章となって示され、ここに蘭文和訳とその方法を説いた蘭文和訳論が誕生した。

「蘭学生前父」をはじめとして、同時代において革命的であった志筑蘭語学は、志筑の門人や又弟子を起点に写本で伝わる。江戸においては馬場佐十郎や大槻玄幹、東海では大垣藩の江馬家や尾張藩の吉雄俊蔵、そして地元長崎においては末次忠助らによって読み継がれていった。

また、これまで看過されてきた資料であるが、ここで京都二条堺町の書林吉田治兵衛の両面摺板行目録『和蘭翻訳書目録』（一八四一年冬刊）に注目したい。その裏面には、志筑忠雄の著作として三段目の天学書欄に「暦象新書」が、最下段の語法書欄に「[蘭学] 生前父」および「四法諸時対訳」の名が見え、いずれも未刻の印▲が付されている。刊記には「右目録の書籍悉く私方ニ御座候。尤写本の内、著訳家の秘として他へ出さゝる書ハ除之。其他ハ悉写本出来申候。入念誤字なき様可仕候。御用被為仰付被下度奉希上候」と書籍販売が広告されるとともに、「▲印あるハ未刻の分なり。新訳書又ハ漏たるものハ追々加刻仕候」と記され、没後三五年を経過した天保一二年冬時点においても、依然志筑のオランダ語文法学書が京都の書肆に有用と認識され、その上梓が構想されていた事実が分かる。

志筑蘭語学の革新性と後世への伝

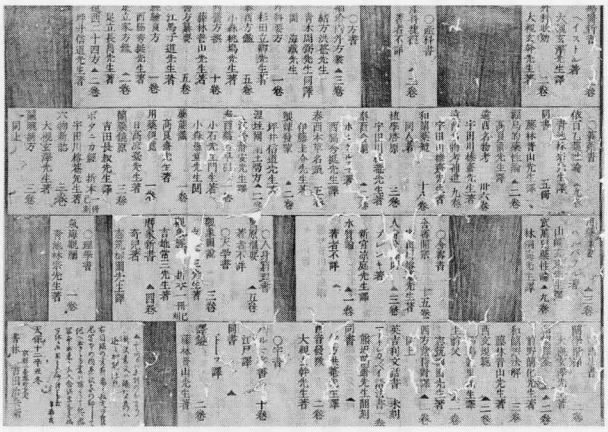


図９－１　京都二条堺町の書林吉田治兵衛による両面摺板行目録『和蘭翻訳書目録』（1841年冬刊、裏面、熊本県立大学歴史学研究室蔵）

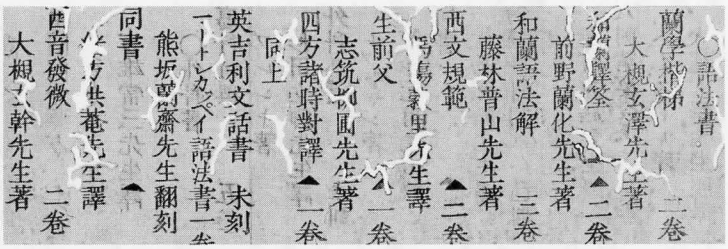


図９－２　部分拡大図。「語法書」中に、志筑忠雄「（蘭学）生前父」と「四方諸時対訳」が見える

図９－３　部分拡大図。「暦象新書」は「天学書」と位置づけられていた

播については、およそ以上の様相が認められるものの、阿蘭陀稽古通詞を辞職した後は野にあり、四十作を越える著述は全て板行に至らず、加えて後生にも参照されやすい医書や軍書の訳出を行わなかったことなどから、門人や又弟子の死没後は、時間の経過とともにいつしか志筑の名とその数々の画期的な仕事は忘却され、狩野亨吉が再発見する日まで歴史の中に埋没することとなった。

注

（1）志筑忠雄によって成されたオランダ語文法学書の中で「蘭学生前父」を最高の仕事と評価するヘンク・デ・フロートは、同書の成立年次を一八〇四年とした上で、これを分岐点として、「柳圃中野先生文法」（「和蘭詞品考」）、「助詞考」、「蘭学生前父」の三作を前期著作とし、それ以外を後期著作としている。「柳圃蘭語学の影響」（『蘭学のフロンティア――志筑忠雄の世界』、長崎文献社、二〇〇七年）。しかしながら、「蘭学生前父」が一八〇四年に執筆されたとする根拠は無く、また、「和蘭詞品考」において使用された文法用語が「三種諸格」や「蘭学生前父」と異なる点からも、志筑蘭語学に対する整理と見通しに問題がある（本稿表1参照）。

（2）岐阜歴本は内題「蘭学生前父」、外題「生前父」（打付）。神田佐野本は内題「蘭学生前父」、見返し題「蘭学生前父」（打付）。無窮会本については、目下図書館修築中につき資料閲覧ができないため未見。書誌学的には一般に外題や見返し題より内題を重視することから、本稿では書名を「蘭学生前父」で統一する。なお、資料名を示す際、写本には鍵括弧、版本をはじめとした刊行本には二重括弧を用いた。また、旧字・異体字は現在通用する字体に改め、適宜句読点を付した。以下、全ての引用文で同。

（3）「蘭学生前父」を主題とした先行研究は、杉本つとむによる「中野柳圃『蘭学生前父』の考察」（『近代語研究』二、武蔵野書院、一九六八年［のち『蘭学と日本語』、八坂書房、二〇一三年に再掲］）、ならびに「柳圃学と『蘭学生前父』」（『江戸時代蘭語学の成立とその展開――長崎通詞による蘭語の学習とその研究』、早稲田大学出版部、一九七六年）が挙げられる。前者は無窮会本と早大本に基づいて、使用されている文法用語や国学との関係に着目しつつ、内容を概観的に紹介する。後者は現神田佐野本（若林正治「古書肆若林春和堂」旧蔵本）にまで目配りしているものの、内容的には先の論文の域を出ない。寺田智美翻刻・解題、杉本つとむ校閲「翻刻解題『蘭学生前父』」（『早稲田大学図書館紀要』第四四号、一九九七年）は、早大本の翻刻を行い、簡潔な解題を付した。松田清「志筑忠雄における西洋文法カテゴリーの受容」（『蘭学のフロンティア――志筑忠雄の世界』、長崎文献社、二〇〇七年）は、「蘭学生前父」における品詞理解に、漢語の特質を応用しようとする志筑忠雄の意思を見る。

（4）底本は『初期日本蘭仏独露語文献集』（マイクロフィルム、雄松堂、一九八五年）を使用。

（5）岡村千曳旧蔵本。なお、当該写本は、大垣藩の蘭学者で後に津山藩宇田川家の養子となり、同藩医となった宇田川榕庵蔵本に遡る。

（6）「〇同く過去なるに geleerd hebben は学ひつと訳し、geweest zijn をはありぬともありつとも訳せすして学たりきなとありきと訳する事ハ、ありといふ詞は他の動詞と異なるか故也。但和書に希には有いなともいへとも是もまたありきの意なり。現在の語には学ひつ学ひきの別あれとも、事跡には学ひつとありきとのミあり。leeren［ママ］と geleerd worden と二種の諸格は spraakkonst には具に見たれとも、今は leeren の方のミ逐一出して leerdworden の方ハ略せり。推て知るへきか故なり。然れとも又本書に出せる語のミにてハ、和語の対訳に於て猶紛はしく詳なりぬ事あるか故に、今假に私に geleerd man zijn 以下の四種を出しつ。文化二年二月。柳圃書」。なお、「leeren」の不定形は、現今では leeren と綴る。以下、綴り誤りや現在と綴りが異なっている際には［ママ］と記したが、同段落内の記述や引用文中に何度も同じ綴りが登場する場合は初出のみ示した。

（7）「不限時」の和訳を示した個所に「ましと訳する法の事ハ、詳ニ予か生前父に見たり」（五丁表～裏）とあり、また、接続法の和訳の在り方を説いた

個所でも「予か生前父に詳に言るか如し」（八丁表～裏）と見える。

（8）日本学士院蔵本より。ただし、奥書は「享和四甲子歳春正月　崎陽　中野忠雄稿／甲子孟陬人日」とあり、まだ署名が不安定な時期である。「孟陬」とは陰暦正月の異称で、「人日」とは節句の一つで、一月七日。

（9）益満まを「草創期の京都蘭学――《辻蘭室文書》の書誌的考察――」（松方冬子編『日蘭関係史をよみとく』上巻つなぐ人々、臨川書店、二〇一五年）二四一～二四二頁。

（10）「柳圃」号の使用に著作の成立時期を探る方法は、既に拙稿「志筑忠雄「三種諸格」の資料的研究」（『鳴滝紀要』第二八号、二〇一八年）で示した。

（11）前掲杉本つとむ「中野柳圃『蘭学生前父』の考察」（同『蘭学と日本語』）、九一頁。

（12）蔵書印記「江馬元益」、「春齢庵図書」より。

（13）第一奥書「文政五壬午春二月晦日校合于尾張名古屋観象堂与陸奥／仙台藩人小山光□（命カ）」、第二奥書「文政五壬午春二月晦日尾張名古屋観象堂之塾／与陸奥仙台藩人小山光命校合之」より。

（14）両本は早大本や無窮会本に欠落している志筑忠雄の自序を備えているのみならず、脱落や誤記、オランダ語の綴り誤りなどが比較的少ないことから、以下の「蘭学生前父」の引用では、基本的に岐阜歴本を底本として、神田佐野本で補う方針とする。

（15）岐阜歴本を底本として、角括弧で神田佐野本における異同を示した。反対に、両者に揃っていない記述については、早大本を参照した上で適宜削除した。ただし、表記や用字が異なるだけの場合や、ルビあるいは送り仮名の有無・異同については補っていない。なお、原文に引かれている各種の傍線や傍点は省略し、筆者によって新たに傍線、二重傍線を付した。以下、特別な断りが無い限り、「蘭学生前父」の引用はかかる方針で行う。

（16）該歌は既に松永貞徳「長頭丸随筆」（一六〇五奥書）に認められる。岸上操編『少年必読日本文庫』第拾編（博文館、一八九二年）。なお、「長頭丸随筆」では本道歌の作者は足利義政とされている。山崎美成『三養雑記』（一八四〇刊）でも「長頭丸随筆」を引き、作者は足利義政であるとしている。なお、一休禅師作という言説は、近代以降に誕生したようである。また、杉本つとむも「蘭学生前父」序には着目しており、歌が和歌か道歌であろうこと、書名が歌にちなんで付されたことまでは推測しているが、歌の同定には至らず、よって書名の意味や正しい読みには辿り着いていない。前掲「柳圃学と『蘭学生前父』」、二七〇頁。

（17）例えば、富士信仰系の版本『生下未分語』（一六四七刊）には、道歌も「父母未生以前本来面目」という文句も見える。ただし、本書では道歌の「父」が「母」に作られている。大谷正幸「『生下未分語』翻刻――富士講研究に関連して」（『仏教文化学会紀要』第一二号、二〇〇三年）、九五、一一四頁。

（18）『荻生徂徠全集』第五巻（河出書房新社、一九七七年）、一六～一七、二四頁。原文の表記および書き下し文は底本に従った。なお、杉本つとむも徂徠学の影響には着目しており、「蘭学生前父」序の「物氏の訳筌」を『訳文筌蹄』と推測している。前掲「柳圃学と『蘭学生前父』」、二七〇頁。

（19）田尻祐一郎「〈訓読〉問題と古文辞学――荻生徂徠をめぐって」（中村春作、市來津由彦、田尻祐一郎、前田勉共編『訓読論　東アジア漢文世界と日本語』、勉誠出版、二〇〇八年）。

（20）「欧文訓読」の謂は、森岡健二『欧文訓読の研究　欧文脈の形成』（明治書院、一九九九年）に拠る。

（21）岐阜歴本の本文では「秘訣」と「秘訳」が混同して用いられているが、神田佐野本の目次・本文ならびに早大本の本文では「秘訳」とある。「訣」と「訳」との草書は酷似しており、誤りやすい。以上を勘案して「秘訳」とした。以下同。

（22）各項目の概観は、前掲寺田智美翻刻・解題、杉本つとむ校閲「翻刻解題『蘭学生前父』」（九二～一〇〇頁）を部分的に参照した。

（23）志筑忠雄が叉角的五分法に基づいていたことは、岡田和子が指摘している。「森田千庵『四十五様』について――中野柳圃・森田千庵と仏文法の関係――」（『洋学史研究』第二八号、二〇一一年）、三八～三九頁。ただし、「四法諸時対訳」で、志筑が八時制を提示していることが斎藤信によって指

摘されている。「中野柳圃の『四法諸時対訳』について」（『人文社会研究』第一七巻、一九七三年）、四七～四八頁。

(24) 存在動詞 zein の過去形。現今では waren と綴る。

(25) 現今では、不定形は spreken と綴る。なお、岐阜歴本では明らかな綴り誤りが認められるため、ここでは神田佐野本と早大本の記述を用いた。

(26) 現今では、不定形は kunnen と綴る。

(27) 前掲寺田智美翻刻・解題、杉本つとむ校閲「翻刻解題『蘭学生前父』」、九九頁。

(28) 岐阜歴本では受動態が過去形、ついで現在形の順に配列されているが、神田佐野本および早大本では現在形、過去形の順位に配置されている。時制の並びから言っても、神田佐野本および早大本が適切だと考えられることから、その順に示した。

(29) 三人称単数に対応した形は、現今では wordt と綴る。

(30) 中略は［…］で、割注内の記述は墨付き括弧で示した。以下、全ての引用文で同。

(31) 岐阜歴本には「三十七則」とあるが、明らかな誤りのため、神田佐野本と早大本に基づいて「二十七則」とした。ただし、本文で挙げられている例は二六であり、「二十七則」も正しくない。

(32) 前掲杉本つとむ「柳圃学と『蘭学生前父』」、二八三頁。

(33) 本書には、二三二頁から成る一七〇八年版と、四五五頁から成る一七一二年版、一七三三年版、一七五六年版があり、後三者は内容も同一である。志筑がどの版を底本としたかは不明。松田清『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八年）、七三、二九六頁。

(34) 前掲拙稿「志筑忠雄「三種諸格」の資料的研究」、一四～一五頁。

(35) 『訓訳示蒙』巻五より。前掲『荻生徂徠全集』第五巻、四三九頁。

(36) 両者ともに『古今集遠鏡』例言が典拠。『本居宣長全集』第三巻（筑摩書房、一九六九年）、九～一〇頁。

(37) 語例については鍵括弧で示した。以下同。また、傍線部について、岐阜歴本では「国字」、神田佐野本および早大本には「国学」とあるが、いずれを正しい記述とする決め手は無い。

(38) 『詞の玉緒』一之巻より。『本居宣長全集』第五巻（筑摩書房、一九七〇年）、一九頁。原文の表記は底本に従った。

(39) 便宜上、各文の冒頭に番号を付した。また、神田佐野本の第8文和訳は「言ふ語」とあるが、明らかな誤りなので早大本で確かめた。また、同じ第8文の説明付記で、岐阜歴本では「彼言之語」とあるが、これは「被」字の写し誤りと見られることから、神田佐野本と早大本の「被言之語」に従った。

(40) 玉田沙織「和歌の同化翻訳論――本居宣長の俗語訳理論から――」（高橋亨編『日本語テクストの歴史的軌跡』、名古屋大学大学院文学研究科、二〇一〇年）、六〇頁。

(41) 岐阜歴本では「長閑」に「イドカ」とルビが振られているが、神田佐野本では原本を確認してもルビはなく、他方、早大本では本文で「ノドカ」とある。以上から岐阜歴本の表記を誤写と捉え、ここではルビを「ノドカ」とした。

(42) 神田佐野本で一部錯綜が見られた部分は早大本をもって補った。なお、歌とその訳は冒頭を二字落として示した。以下、全ての引用文で同。

【付記】写真掲載を許可くださった岐阜県歴史資料館をはじめとして、資料調査で御世話になった各所蔵機関に御礼申し上げます。